

短期大学における教育・保育実習に関する異学年交流学習会の教育効果(2)

岡村 奈緒美, 宮崎 大樹, 浜田 幸作, 池澤 眞由美, 竹村 正,
吉村 斉, 寺尾 康, 田村 由香, 山本 英作, Paula D.Fabian, 大松 伸洋

原 著

短期大学における教育・保育実習に関する異学年交流学習会の教育効果(2)

岡村 奈緒美^{1*}, 宮崎 大樹¹, 浜田 幸作¹, 池澤 眞由美¹, 竹村 正¹,
吉村 斉¹, 寺尾 康¹, 田村 由香¹, 山本 英作¹, Paula D.Fabian¹, 大松 伸洋¹

要約：本稿では、幼稚園教諭・保育士の養成課程における教育実習及び保育実習の事前・事後学習の視点から、「異学年交流学習会」のアンケート調査の結果を分析し、その教育効果を考察している。アンケート調査の対象は、2019年度の異学年交流学習会に参加した1年生63名、2年生77名である。このアンケート調査の結果に対して、先行研究をもとに事前・事後学習としての取り組み状況と期待される教育効果について検討を加えたところ、学習会は実習指導の科目を補う学習として位置づけられることが明らかになった。そして、事前・事後学習の教育効果として「実習実践における理論・技術の意味の再確認」や「経験を言語化し伝えることによる自己成長」などが示唆された。しかし一方で、これらの効果を得るためには、実習不安を安心や期待に変換していく仕組みづくりや1年生から2年生へのフィードバックの課題があることも明らかになった。そのため、今後は、より効果的なプログラムの検討や事前・事後学習それぞれの教育効果について、カリキュラムとの関係もふまえて検討していく必要がある。

キーワード：保育実習, 幼稚園実習, 事前・事後学習, 異学年交流学習会

1. はじめに

幼稚園教諭・保育士などの保育者を目指す学生にとって、教育実習及び保育実習（以下、実習）は、養成校での学びと現場での学びを往還させ、保育者としての専門性を身につけていく貴重な機会である。実習を通して、学生は理論と実践の理解を深めるだけでなく、保育者効力感の高まりや子ども集団や個人への対応を身につけていくのである。しかしながら、実習でこれらの効果を得るためには、多くの課題があることも事実である。たとえば、三木知子と桜井茂男¹⁾は、実習を通じて学生の保育者効力感を高めるために、実習園の雰囲気や方針と自分の期待との合致感が影響することを指摘している。このことから、実習での効

果的な学びは、事前学習のなかで実習園についての理解や保育者としての自己理解を深め、期待と現実のギャップを埋めていくことが重要になると考えられる。また、大神優子²⁾によれば、学生は複数回の実習において、観察中心となる前半の実習で子ども達の反応を知り、後半の実習で子ども集団への対応力を身につけ、その後、個別対応力を成長させていく。それゆえ、それぞれの実習の課題に応じた、事前・事後指導が必要となる。

このように、実習での学びを深めていくためには、実習中の体験のみならず、実習前後の事前・事後学習が不可欠である。そして、この事前・事後学習では、実習園や保育者の専門性に対する理解はもちろん、実習の不安やストレスへの対応も

¹⁾ 高知学園短期大学 幼児保育学科 *Email: nokamura@kochi-gc.ac.jp

重要となる。なぜなら、学生が実習への不安と向き合い、それを乗り越えることは、彼らの達成感や保育者としての成長につながるからである。実際に、佐野友恵と廣橋容子³⁾の調査結果では、実習前の不安の高い学生の方が、実習後の保育者志向の高まりなど、プラスの変化がみられた。一方で、実習前はそれほど不安を感じていなかった学生が、実習のなかでその大変さを痛感し保育者としての意欲をなくすなど、ネガティブに変化する場合もある。この調査結果から、実習不安と現実をうまくすり合わせることで、より効果的な実習の学びにつながると推察できる。

こうした背景をふまえて、筆者の所属している高知学園短期大学幼児保育学科では、実習に取り組む学生の不安やストレスを軽減し、実習の学習効果を高めていくことを目的とした、「異学年交流学習会」(以下、学習会)を2017(平成29)年度から実施している。この学習会は、はじめて実習に取り組む1年生と、幼稚園での教育実習を終えた2年生が相互交流を行う学科行事と位置づけられている。当初、1年生の実習不安の軽減と異学年交流を目的に、学科行事としてはじまった学習会であったが、実施後のアンケート結果からは、1年生の不安軽減だけでなく、実習を終えた2年生の事後学習としての効果も示唆された。具体的には、学習会を通して「2年生の学生自身が実習を振り返り、まとめ、伝える事で自己肯定感が向上し、教育者・保育者としての自覚が芽生えるきっかけ」⁴⁾となる可能性を見いだすことができたのである。

そこで本稿では、今後、学習会を実習の事前・事後学習として位置づけ、その教育効果を得るための課題を、先行研究とアンケート調査の分析から明らかにしたい。具体的には、2018(平成30)年度と2019(令和元)年度に実施した学習会の取り組みとアンケート調査の結果をもとに、以下の3点について検討していく。

- ①学習会の事前・事後学習としての取り組み状況の確認
- ②実習の事前・事後学習として期待される学習

会の効果

- ③学習会を事前・事後学習として位置づけていくための今後の課題

これらの内容を明らかにしていくことは、実習の事前・事後学習の効果的な取り組みの提案にもつながると考えている。そのため本研究では、まず先行研究から、実習の事前・事後学習に必要な達成目標や取り組み内容を明らかにしたうえで、学習会の内容を事前・事後学習として再検討していきたい。

II. 実習事前・事後学習としての異学年交流学習会の意味

(1) 事前学習としての取り組み

一般的に、実習の事前・事後学習は、養成課程において実習指導と呼ばれ、必修科目としてその時間が確保されている。教職員免許法施行規則⁵⁾によると、幼稚園教諭の養成課程では、必修科目である「教育実習」(5単位)のなかに、「教育実習に係る事前及び事後の指導」(1単位)を含むとされている。また、保育士養成課程では、『指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について』⁶⁾で「保育実習Ⅰ」と「保育実習指導Ⅰ」が必修科目とされている。この保育実習の実習指導については、同通知の別添1のなかで表1のように示されている。

表1を見てわかるように、実習指導では、①実習の意義・目的の理解、②実習で学ぶべき内容・課題の理解、③実習に取り組む際の留意点、④実習で学ぶべき計画・実践・記録方法等の理解、⑤実習の振り返り、という事前・事後学習を1つの科目のなかで取り組まなければならない。このなかで、事前学習の内容に焦点を当てると、①～④までが事前学習の内容であり、実習指導の多くは、事前学習の時間に当てられているとわかる。ところが、実際の実習指導では、厚生労働省の提示した内容には含まれていない、実習のための書類作成や社会人としてのマナー指導などに多くの時間が割かれている。このような現状をふまえて、中原大介⁷⁾は、書類作成やマナー指導を実習指導と

して教授したうえで、実習指導で補うことのできない学生の抱える実習不安に対して、カリキュラム上の工夫や教員同士の協働による「多様な学生のニーズ」に応える教育展開が必要であると指摘している。

表 1. 保育実習指導 I の目標と内容

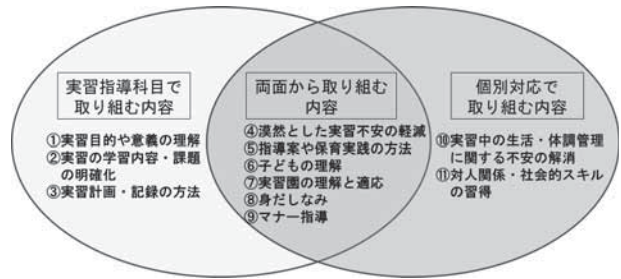
目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 保育実習の意義・目的を理解する。 2. 実習の内容を理解し、自らの実習の課題を明確にする。 3. 実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について理解する。 4. 実習の計画・実践・観察・記録・評価の方法や内容について具体的に理解する。 5. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、今後の学習に向けた課題や目標を明確にする。
内 容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 保育実習の意義 <ol style="list-style-type: none"> (1) 実習の目的 (2) 実習の概要 2. 実習の内容と課題の明確化 <ol style="list-style-type: none"> (1) 実習の内容 (2) 実習の課題 3. 実習に際しての留意事項 <ol style="list-style-type: none"> (1) 子どもの人権と最善の利益の考慮 (2) プライバシーの保護と守秘義務 (3) 実習生としての心構え 4. 実習の計画と記録 <ol style="list-style-type: none"> (1) 実習における計画と実践 (2) 実習における観察、記録及び評価 5. 事後指導における実習の総括と課題の明確化 <ol style="list-style-type: none"> (1) 実習の総括と自己評価 (2) 課題の明確化

(厚生労働省⁸⁾の表をもとに筆者作成)

さらに、中原⁹⁾は実習指導で補うことの難しい実習への不安として、「実習先での人間関係・コミュニケーション」と「実習中の生活・体調管理」の2つをあげている。このような実習不安に関して、枝元香菜子と山本礼二¹⁰⁾は教職課程の実習における学生の不安の変容について調査している。その結果、身だしなみや指導案に関する不安は、実習指導によって軽減するが、実習中の心身の疲労に関する不安は、授業を通して意識化され、より高まることが明らかになった。同様に、大野木裕明と宮川充司¹¹⁾も、教職課程の学生を対象とした実習不安に関する調査を行い、実習を行う学生の抱える不安として、①授業実践力、②児童・生徒関係、③体調、④身だしなみ、を明らかにしている。これらのうち、①授業実践力、②児童・生徒関係に関する不安は、専門的な力量に関する不安であり、養成校における関連科目の積極的な

学習によって対応する必要がある。一方で、③体調および④身だしなみへの不安は、社会人としてのスキルの問題である。そのため、実習に限らず養成校全体での指導や取り組みによって対応すべき不安であるといえる。

これらの先行研究からわかるように、事前学習は、実習内容に関する指導だけでなく、社会的なスキルや個々の学生の抱える不安への対応など、幅広い内容が求められる。また、その取り組みは実習指導の科目内だけでなく、養成校全体で取り組む個別対応やその両面から対応しなければならない。そこで、先行研究をもとに事前学習の学習内容と取り組みを整理したものが、図1である。



(筆者作成)

図 1. 事前学習として取り組む学習内容

少し説明を加えると、①実習の目的や②実習の学習内容、③日誌などの記録の方法は、養成校として実習を行う学生に求める共通事項であり、実習園の状況にかかわらず、実習指導の一斉授業で均等に教授すべき内容である。一方で、個々の学生の抱える④漠然とした実習不安や⑤実践方法の不安は、一人ひとりの習熟度による差が大きいため、一斉授業でフォローしていくことは難しい。同じように、⑥子どもの理解や⑦実習園の理解は、個々の実習園の雰囲気や業務の流れを理解しなければならないため、実習指導に加えて、個々の調べ学習やフィールドワーク、ボランティア経験などで補う必要がある。また、⑧身だしなみ、⑨マナー指導では、個人情報取り扱いやTPOに応じた服装など、専門職としての守秘義務だけでなく、就職や社会人としての指導と重なる部分が多く、養成校全体で対応すべき内容であるといえよ

う。そのため、④～⑨までの内容は実習指導の科目だけでなく、他の科目や日常的な個別対応と併せて実施すべき項目と考えられる。そして、⑩実習中の生活、⑪対人関係・社会的スキルは、学生の生活や性格など、個人の要素が大きく影響する内容である。そのため、一斉授業での対応はほぼ不可能であろう。とくに、学生個人の生活は、プライバシーの問題もあるため、教員との面談など個別対応が求められる内容となっている。

本学科の事前学習の状況も、この図1に当てはまる。本学科では、各実習それぞれに実習指導の科目が設けられており、①～③までの実習の目的や実習園の概要、書類作成、日誌・指導案の書き方についての指導を行っている。また、必要に応じて学生と実習担当教員や学科内の教員が個別面談を行い、⑩～⑪の相談にも対応している。そのため、学習会では、実習指導の科目内で補いきれない④～⑨の内容を中心に取り組むことで、実習指導や個別対応の教育効果を促していくことができると考えられる。

(2) 事後学習としての取り組み

次に、実習の事後学習の内容についても先行研究をもとに整理していく。すでに表1の実習指導の内容で示したように、事後学習は実習の振り返りと自己評価・課題の明確化が中心の取り組みである。そこでは、実習体験の客観的な振り返りを通して、個別の実習体験から、専門的な保育者像の形成が行われる。全国保育士養成協議会¹²⁾の調査結果を見てみると、こうした振り返りの方法として、個別面談やレポート、グループワーク、報告会といった形態が多く用いられ、学生自身の課題への気づきが促されているようである。

しかし、遠藤純子¹³⁾は、いずれの方法であったとしても、学生の主体的に経験を振り返ろうとする姿勢が、事後学習に不可欠であると指摘している。そして、そのための動機づけの方法として、上級生と下級生を1グループとした異学年のグループワークを提案している。彼女によると、事後学習の振り返りでは、誰と行うかという「関係性」と、いつ行うかという「時間性」が重要となる。

解説を加えると、まず「関係性」とは実習を行った学生と振り返りを行う相手が、教員、同級生、下級生のいずれかで着目する内容が異なることをあらわしている。たとえば、個別面談など教員と振り返りを行う場合、学生は教員を評価者として意識してしまう。それゆえ、学生は「正しい」と評価される内容にしか着目できず、率直な自分の意見や悩みなどの経験を深めることが難しくなる。一方、相手が同級生や同じ実習を経験した学生であれば、同じ目線で実習経験を共有することを求めて、愚痴や自分の弱さを語り、励ましあうことができる。このような振り返りは、授業のグループワークとして行われることが多く、学生の気持ちの整理に役立つと考えられる。そして、相手が下級生の場合、学生は自らの過去を振り返り、「不安だった自分」と下級生を重ねあわせて、自分に必要だった内容に着目すると推察される。そのことは、「下級生の不安を和らげてあげたい」という学生の主体的な振り返りを引き起こすと考えられる。また、不安を抱えた下級生との交流は、過去の自分を振り返り、実習による自己の成長への気づきも促すと考えられる。このことについて、井口眞美¹⁴⁾は、実習中に実習生を指導する実習指導者を対象とした調査において、実習指導の経験が、自らの保育を見直し、自分と異なる視点からの気づきを生み出すことを明らかにしている。そこでは、自分の実践の意図や経験を実習生に説明することで、自己評価や言語化といった保育の質向上を促していくことが示唆されている。このように、事後学習の振り返りを誰と行うかという「関係性」は、振り返りの内容を左右する重要な鍵となっている。

一方で、「時間性」は、実習による成長を感じ取るための要素である。遠藤は、実習から振り返りまでの間に、大学での学びや他の経験を重ねることで、多角的な視点から実習経験を振り返ることができるようになると説明している。つまり、実習直後は失敗と感じ、肯定的に評価されなかった出来事であっても、時間を置き、客観的な視点から再評価することで、自分の成長のきっかけと

してとらえ直すことができるのである。そのためには、実習経験の振り返りまでの間に、多様な評価の視点を身につけるための機会と時間を確保することが重要になる。具体的には、他者との意見交換やレポートによる実習経験の言語化・視覚化を通して、さまざまな考え方や視点があることを学ぶ機会を設ける必要があるだろう。

遠藤の提案する異学年のグループワークの方法に依拠して、本学科の学習会における「関係性」と「時間性」を整理すると、図2、図3のように示すことができる。

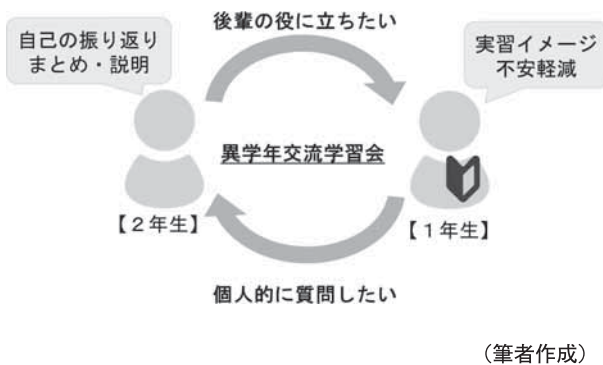


図2. 学習会における振り返りの関係性

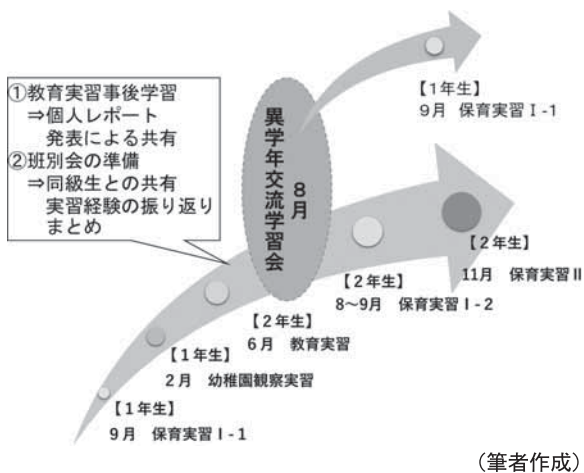


図3. 学習会までの時間性

まず学習会は、教育実習を終えた2年生と、はじめての実習を控えた1年生の関係性のなかで行われる(図2)。学習会は、2年生が主体となるよう、準備段階で「去年、先輩方に助けてもらったことを思い出し、聞いておいて良かったことを1年生へアドバイスしてあげるように。」と強調

して2年生に伝えている。このような働きかけもあり、2年生の「後輩の役に立ちたい」という動機づけや実習中の自分の言動、1年時からの成長についての振り返りが促されると考えている。また、1年生にとって学習会は、普段交流する機会の少ない2年生から、実習園の様子や実習中の生活など個人的な質問ができる貴重な機会である。それゆえ、1年生からは積極的に質問しようという主体的な態度がみられる。実際に、1年生を対象とした事前アンケート(6月)を実施したところ、「2年生に聞きたいこと」として、大変だったことや朝起きてから寝るまでの生活など、自分の不安に結びつけた質問が多くだされていた。このことから、学習会は1年生、2年生共に主体的に参加する、事前・事後学習の方法といえるだろう。

次に、学習会までの時間性を見ていきたい。本学科では、1年生の9月に実施する「保育実習I-1」を皮切りに、「幼稚園観察実習」(1年生2月)、「教育実習」(2年生6月)、「保育実習I-2(施設)」(2年生8～9月のうち10日間程度)、「保育実習II」(2年生11月)の合計5回の実習を行っている。そのなかで、学習会は図3のように、1年生の保育実習I-1の事前学習と2年生の教育実習の振り返りとして設定している。つまり、振り返りの時間として、6月の実習から1ヶ月ほど確保している。その間、実習指導の科目に該当する「教育実習の研究」の授業のなかで、個人レポートの作成と発表という事後学習が行われる。また、関連科目である「教職実践演習」の授業において、学習会の準備がすすめられ、同級生との実習体験の共有や振り返りも行っている。このように、学習会開催までの2ヶ月間のなかで、授業内の共有や個別指導によって、多様な視点を身につける機会を確保している。このことは、学習会における客観的な自己評価や体験のとらえ直しにもつながる。

以上のように、学習会を事後学習と位置づけるならば、その取り組みは学習会の準備からはじまるといえよう。そして、準備段階での同級生との

交流や学習会における1年生との交流を通して、表2の事後学習の取り組みが期待できると考えている。

表2. 学習会における事後学習の取り組み

① 1年生からの成長の振り返り
② 実習経験の自己評価
③ 保育者としての専門的知識・技術の共有
④ 実践の意図や意見の言語化
⑤ 自己の課題への気づき

(筆者作成)

(3) 実習事前・事後学習としての異学年交流学習会の取り組み

ここまで、先行研究をふまえて実習の事前・事後学習として必要な学習内容をそれぞれ整理してきた。そして、その内容と照らし合わせて学習会の取り組みを見ていくと、学習会は実習指導の科目を補う事前・事後学習として、有効な学習方法になり得ることが示唆された。

そこで、本研究では学習会を1, 2年生の実習事前・事後学習として位置づけ、その教育効果とより効果的な教育プログラムにしていくための改

善点を検討したいと考えている。とくに本研究で取り組む学習会は、従来の事前・事後学習と異なり、異学年交流による1, 2年生両者の教育効果を期待できる取り組みである。そのため、事前・事後学習それぞれの教育効果だけでなく、相互交流による教育プログラムの総合的な効果にも着目し、分析を進めていきたい。まずは、2018(平成30)年度に実施した学習会の取り組みと、ここまで明らかにしてきた事前学習の内容(図1)、事後学習の内容(表2)を照らし合わせ、事前・事後学習としての学習会の学習内容を整理し、2019(令和元)年度の学習会の内容を検討した。その結果が、表3である。なお、2018(平成30)年度に実施した学習会の内容やアンケート結果の詳細については、宮崎大樹ら¹⁵⁾の報告を参照していただきたい。

学習会の構成は、取り組みのはじまった2017(平成29)年度から全体会と班別会の2部構成で実施している。2018(平成30)年度のアンケート結果では、全体会に対する満足度の低さと、班別会の充実という2つの課題が明らかになった。まず、全体会の満足度の低さの原因の一つに、報告内容と1年生の実習イメージのギャップがあると考えられる。全体会の報告内容である「教育実習

表3. 事前・事後学習の学習内容をふまえた学習会の取り組み

事前学習としての取り組み	学習会の内容	事後学習としての取り組み
①実習の意義・目的の理解 ②実習の学習内容・課題の明確化 ④漠然とした実習不安の軽減	1. 全体会 1) 学科長挨拶 2) 2年生の発表 a 実習全体について(1名) b 教育実習の取り組み(5名) 3) 質疑応答	③保育者としての専門的知識・技術の共有 (④実践の意図や意見の言語化)
③実習計画・記録の方法 ④漠然とした実習不安の軽減 ⑤指導案や保育実践の方法 ⑥子どもの理解 ⑦実習園の理解と適応 ⑧身だしなみ ⑨マナーの指導 ⑩実習中の生活・体調管理に関する不安の解消 ⑪人間関係・社会的スキルの習得	2. 班別会 1) 実習地区別でのグループ分け(1, 2年生混合) 2) 2年生のプレゼンテーション(各グループ内) 3) 1年生からの質問	①1年生からの成長の振り返り ②実習経験の自己評価 ④実践の意図や意見の言語化

(筆者作成)

の取り組み」は、2年生の事後学習の科目である「教育実習の研究」の授業でまとめた実習レポートがベースとなっている。このレポートは、実習の体験を通じて学んだ内容を、保育者の専門性のテーマに応じてまとめたものである。そのため、まだ実習を行っていない1年生にとっては、この報告だけで実習内容を理解することが難しかったと考えられる。また、報告という形式は、講義形式の授業と同様、一方通行の教授となってしまう。そのため、すでに述べてきたような科目を補う事前学習や関係性による事後学習の効果につながらなかったことも一因であろう。そこで、2019（令和元）年度は、全体会報告の最初に「実習全体について」を加え、1年生の実習全体像の理解と学習への導入を図ることにした。また、「教育実習の取り組み」の報告内容も、子どもとの関わりや実習園の先生方の観察、失敗談など、できるだけ多様なエピソードを含んだものをピックアップした。事後学習の視点から全体会を見てみると、報告を聞くことで自分とは異なる視点や経験からまとめられた「③保育者としての専門的知識・技術の共有」することにつながると考えられる。また、報告者6名は、自分の実習体験をまとめ、説明することを通して「④実践の意図や意見の言語化」を実践すると考えられる。そのため、報告者の学習内容については、表中に（ ）として記載した。

学習会のもう一つの課題は、班別会の充実である。班別会は、実習地区ごとの1、2年生混合グループにわかれて交流を行う。グループ内の交流は、2年生のプレゼンテーションを中心にすすめられる。このプレゼンテーションの内容は、2年生自身が1年生のときに不足していると感じた内容や1年生に伝えたいことを、各グループで考え、準備する。それゆえ、プレゼンテーションの内容や方法は、グループごとに異なる。昨年度のアンケート結果をみると、この班別会を「良かった」と評価した割合は、1、2年生とも大きかった。このことは、少人数で行う班別会において、主体的な参加や上級生と下級生という関係性による効果が生じた結果と考えられる。一方で班別会

の評価の高さは、1、2年生両者の期待値の大きさととらえることもできる。それゆえ、班別会の充実という課題に対しては、限られた時間のなかで、どれだけ両者のニーズを満たす学習内容を提供できるかにかかっているといえよう。

そこで、班別会については、準備段階からの改善を試みた。具体的には、先に述べた1年生への事前アンケートの実施と、その内容をふまえたプレゼンテーション準備をすすめることにした。事前アンケートの実施によって、1年生の実習不安の意識化や2年生の1年時の振り返り、1、2年生の学習会にむけた意識のすり合わせを図ったのである。

班別会を通して、1年生は2年生が実際に指導を受けた日誌や指導案の書き方、実習園のクラス分けの状況、子どもや先生方の様子など、個々の不安や実習先の状況に関する詳細な情報を得ることができると考えられる（③⑤⑥⑦）。また、学生目線のアドバイスを受けることで、日頃から気をつけることの意識づけ（⑧⑨）や実習生活全体の理解（⑩⑪）が深まり、④漠然とした実習不安の軽減にもつながるだろう。また、2年生の事後学習としては、1年生の疑問や不安に対する助言を通して、①1年生からの成長の振り返りや②実習経験の自己評価を行うことになる。その際、2年生は1年生に対して「うまくいったこと」や「どうすればいいのか」といったポジティブな内容を伝えようとする と推察できる。ここでは、自分の良かった実習活動や失敗した際の対応の分析が行われる。さらに、2年生は振り返った内容を1年生に伝える必要がある。それゆえ、自分の言動の理由をわかりやすく説明するという④実践の意図や意見の言語化、が行われると期待した。

ここまで、先行研究をもとに学習会の取り組みを実習の事前・事後学習の観点から再検討してきた。しかしこれらは、あくまで学習会の取り組み内容を整理したに過ぎない。そこで、これらの事前・事後学習の取り組みが学習会に反映され、その教育効果を得られているかどうかを、2019（令和元）年度に実施した学習会のアンケート結果か

ら分析していきたい。

Ⅲ. 異学年交流学習会に関するアンケート調査の概要

(1) 調査対象と方法

アンケート調査の対象は、2019（令和元）年度の学習会に参加した高知学園短期大学幼児保育学科の1年生63名、2年生77名である。アンケート調査は、2019（令和元）年8月に実施した学習会の後に集合調査法で行い、回収率は100%であった。

また、倫理的配慮としてアンケート調査票に調査の目的と使用範囲について記載するとともに、口頭でも説明し、調査を実施した。なお、本調査は高知学園短期大学研究倫理審査委員会の承認（第9号）を得て実施した。

(2) アンケート調査の内容

アンケート調査の質問項目は、昨年度からの変化を比較するために、昨年度と同じ表4の内容を使用した。

表4. 各アンケートの質問項目

1年生用	1. この学習会はあなたにとって良かったですか。 2-1. 良かったと答えた人は何が良かったですか。 2-2. それはどのような理由からですか。 2-3. 先輩からのアドバイスで良かったことは何ですか。 3. 良くなかったと答えた人は何が良くなかったですか。 4. 来年の実施に際して、あなたは何を期待しますか。 5. この交流学習会に対して、あなたの意見や要望など率直な意見を述べてください。
2年生用 ①	1. 昨年度の学習会はあなたにとって、実習に役立つものでしたか 2-1. 役立つと答えた人は、何が役立ちましたか。 2-2. それはどのような理由からですか。 2-3. 昨年度の学習会において、先輩から受けたアドバイスで実習に役立ったことは何ですか。 3. 役立たなかったと答えた人は、なぜ役に立たなかったと思いますか。
2年生用 ②	1. 今年度の学習会は、あなたにとって良かったですか。 2-1. 良かったと答えた人は、何が良かったですか。 2-2. それはどのような理由からですか。 2-3. 意識して1年生にアドバイスしたり伝えたりしたことは何ですか。 3. 良くなかったと答えた人は、何が良くなかったですか。 4. 来年の実施に際して、どのような内容を取り入れるとよいと思いますか。 5. この交流学習会に対して、あなたの意見や要望など率直な意見を述べてください。

(筆者作成)

調査票は、①学習会の満足度や得られた学びについて（1年生用）、②実習を終え、昨年度の学

習会を振り返っての評価（2年生用）、③今年度の学習会の満足度や意識して伝えたこと（2年生用-②）、の3種類を用いた。この結果の他に、先ほど取りあげた昨年度のアンケート結果（対象は、当時の1年生77名）の内容も参考資料として用いる。

(3) 分析方法

今回使用したアンケートの質問項目は、もともと授業改善への活用を目的に作成したものであるため、事前・事後学習の項目に、必ずしも対応していない。それゆえ、質問項目と事前・事後学習との関係性を整理したうえで、分析をすすめることにした。まず、事前学習の学習内容の分析用に、1年生用アンケートの設問【2-2】、【2-3】の回答選択肢を表5、表6のように整理した。

表5. 事前学習と質問項目の対応（設問2-2）

事前学習の内容	対応する回答選択肢
① 実習目的や意義の理解	a 本学の方針やポリシーが理解できた
② 実習の学習内容・課題の明確化	d 実習の心構えに役立った
③ 実習計画・記録の方法	
④ 漠然とした実習不安の軽減	c 実習への不安が解消された
⑤ 指導案や保育実践の方法	
⑥ 子どもの理解	
⑦ 実習園の理解と適応	e 実習施設のことが分かった
⑧ 身だしなみ	
⑨ マナーの指導	b 就職やマナーについて学べた
⑩ 実習中の生活・体調管理に関する不安の解消	
⑪ 人間関係・社会的スキルの習得	
※ 設問【2-3】で詳細確認	f 先輩からのアドバイスがためになった
	g その他（具体的に）

(筆者作成)

表6. 事前学習と設問項目の対応（設問2-3）

事前学習の内容	対応する回答選択肢
① 実習目的や意義の理解	g 授業と実習の違いが良く分かった h 日ごろの授業の大切さが分かった
② 実習の学習内容・課題の明確化	i 観察実習で注意すべき点が多かった j 観察実習と責任実習の違いが多かった
③ 実習計画・記録の方法	n 日誌などの書き方の知識を得た
④ 漠然とした実習不安の軽減	m 上級生も同じ不安を抱えていたことが分かって共感を覚えた b 先輩の失敗経験や良かった体験などが参考になった
⑤ 指導案や保育実践の方法	a ピアノや手遊び、絵本など事前準備の大事さが理解できた
⑥ 子どもの理解	f 子どもにしていること、してはいけないことなどが聞けて実行しようと思った e 子どもの発達段階による支援の仕方などを聞いて勉強になった
⑦ 実習園の理解と適応	o 幼稚園と保育園の違いやそれぞれの園の違いが多かった
⑧ 身だしなみ	
⑨ マナーの指導	
⑩ 実習中の生活・体調管理に関する不安の解消	l 自分の意識改革につながった d 遅刻早退などしないように日頃の基本的な生活習慣と健康管理が大事なことを学んだ k 実習に必要な準備物が分かった
⑪ 人間関係・社会的スキルの習得	c 笑顔やハキハキ話すこと、明るさなどが必要なことを聞けて参考になった p その他（具体的に）

(筆者作成)

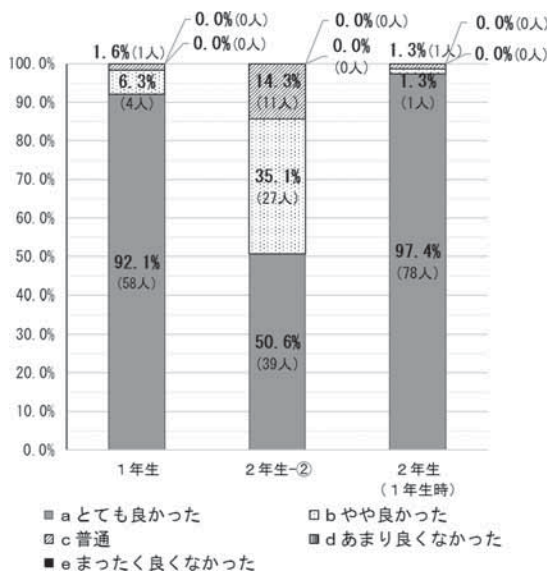
次に、事後学習の分析では、何を伝えたかよりも、どのようなことを振り返ったのかを確認することが重要となる。とくに、1年生の頃の自分や実習中の自分を振り返り、そこから自分の実践の意図や課題を言語化できているかを確認しなければならない。そのため事後学習に関しては、「1年生時の学習会の終了後に良かったと感じていたこと」(昨年度の結果)、「実習を終えて役立つと感じたこと」、「そして振り返りを終えた今回の学習会で意識して伝えたこと」、この3つのアンケート結果の変化を比較していく。

アンケート結果は、この事前学習と事後学習それぞれの分析の視点から整理し、考察を行う。ここでは、まず各アンケート結果のおおまかな傾向を理解するための単純集計およびクロス集計を行い、図表にまとめた。それらの結果と、自由記述に書かれた意見や感想を参考に、事前・事後学習としての学習会の取り組みと教育効果について考察を加えた。

IV. アンケートの結果と考察

(1) アンケート結果の概要

最初に、各アンケート結果の概要を示していきたい。まず、今回の学習会に対する評価を図4に示す。

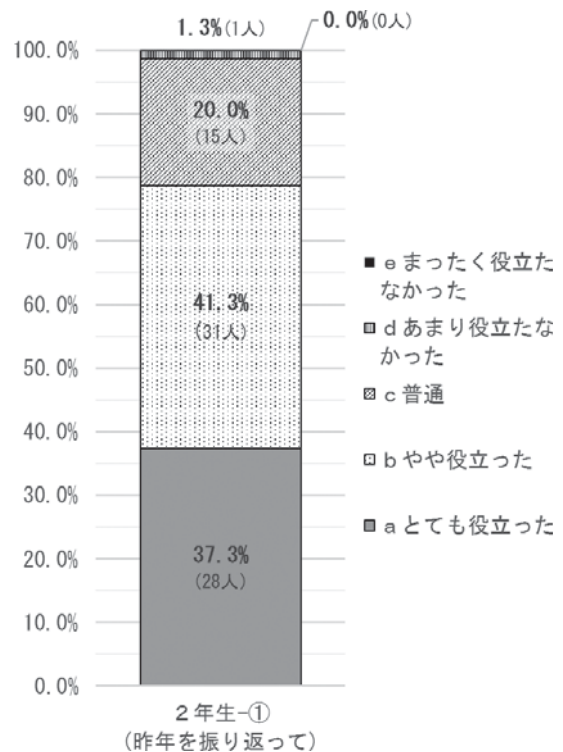


(筆者作成)

図4. 2019年度の学習会に対する評価

図4を見てみると、学習会をa とても良かった、またはb やや良かった、と肯定的に評価した割合は、1年生で98.4% (62人)、2年生で85.7% (66人)であった。全体的には、おおむね肯定的評価という結果であるが、1年生と2年生の間で10%以上の差がみられた。また、この結果は2年生が1年生の時のアンケート結果 (98.7%, 76人)と比較してみても、同様の差が見られる。このことから、1年生の事前学習と比べて、2年生の事後学習としての効果を実感できていない現状が明らかになった。事後学習については、さらに項目を分析し、何らかの対応を考えていかなければならないだろう。

さらに、昨年度の学習会が実習に役立ったかについての評価は、図5のとおりである。この図5を見てみると、a とても役立った、b やや役に立った、と回答した割合は78.6% (59人)であった。



(筆者作成)

図5. 昨年度の学習会が役立ったかの評価

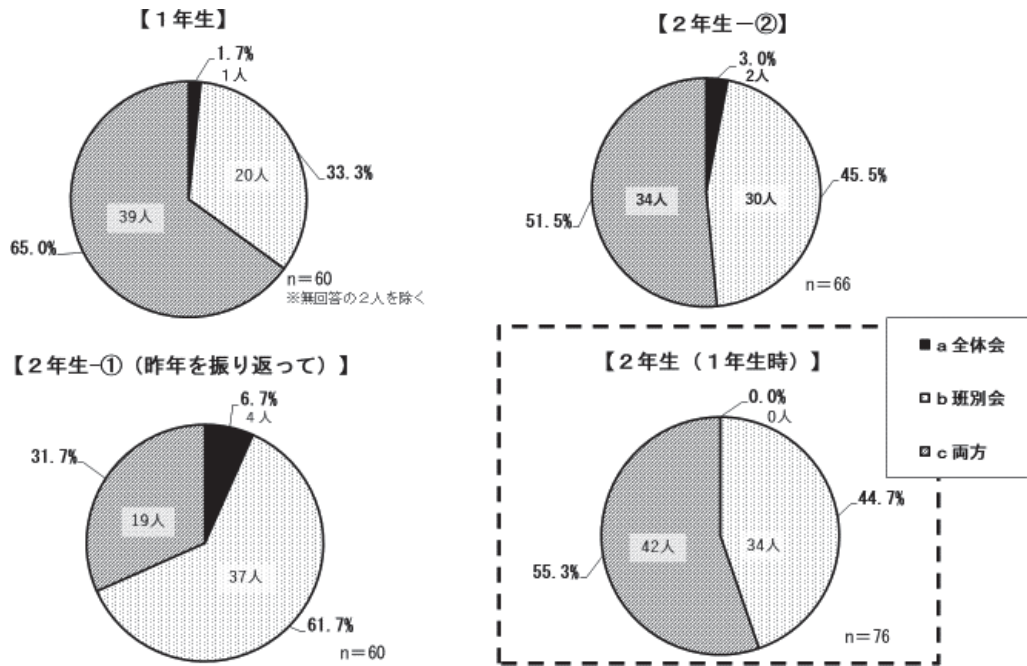


図6. 学習会で良かった内容

具体的に役立つ学習内容については、次の各項目の分析のなかで説明していくが、全体的には学習会の内容が、実際の実習でも役立っていることがわかった。ただし、学習会を終えてすぐの1年時の評価と比較してみると、20%もの差が見られる。このことは、学習会が事前学習として、学生の実習不安軽減の効果につながる一方で、実習に必要な知識や技術の習得という理論の学習にあまり結びついていないからではないかと考えられる。ただし、学習会で取り組む事前学習は、科目でカバーできない学生個人の不安への対応を目的としているため、この結果は本来のねらい通りともいえるだろう。しかし、今回の研究では、そこまでの分析枠組みがないため、このような差が見られた要因の検討については、今後さらに詳細な分析が必要である。

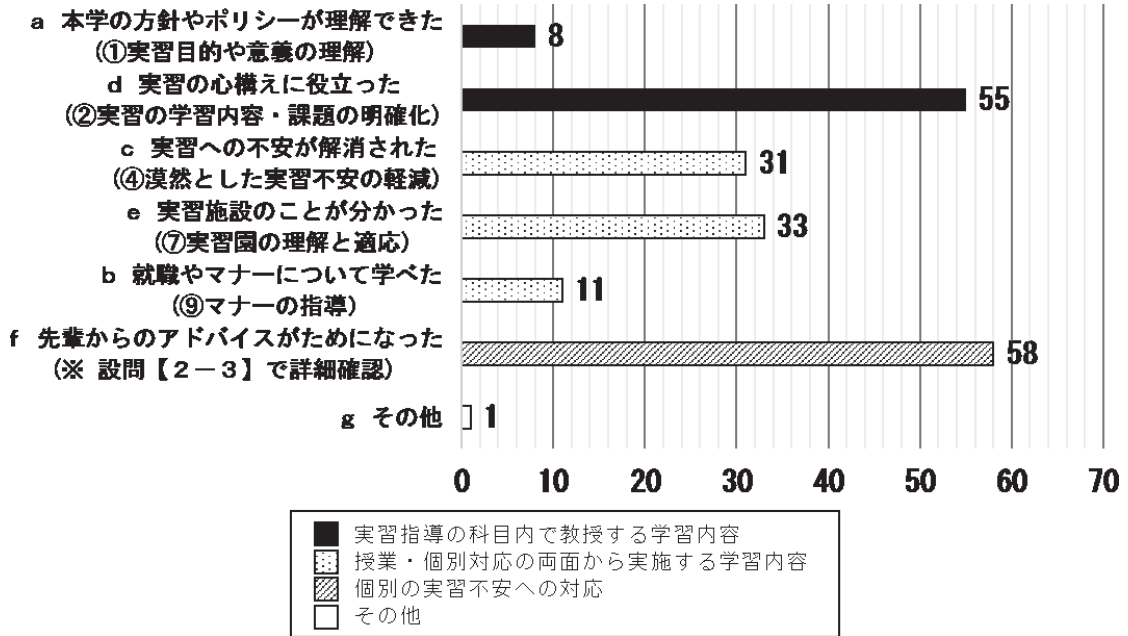
次に、学習会を肯定的に評価した学生に対して、a 全体会、b 班別会、c 両方のうち、どのプログラムが良かったかについて回答を求めた。この結果から、今回の変更点の影響を確認していきたい。なお、今回は全体会を学習会の導入と位置づけ、実習全体のすすめ方と実習内容のイメージを共有できるよう変更を加えた。それゆえ、昨年

度よりも c 両方を選択する割合が増加することを期待している。そして、各アンケートの結果をまとめたものが、図6である。

まず、今年度の学習会について【1年生】、【2年生-②】の結果を見てみると、c 両方を回答した割合は1年生で65.0% (39人)、2年生で51.5% (34人)であった。一方で、b 班別会のみを選択した割合は、1年生33.3% (20人)、2年生45.5% (30人)であり、昨年度に引き続き全体会を良かったと感じられていない学生が多くいるということは、残念な結果であるといえる。しかし、【2年生 (1年生時)】の結果と今年度の【1年生】の結果を比べると、c 両方を回答した割合が10%程度増加している。その意味では、1年生の実習内容理解をねらいとした全体会の重要性が示唆されたといえよう。

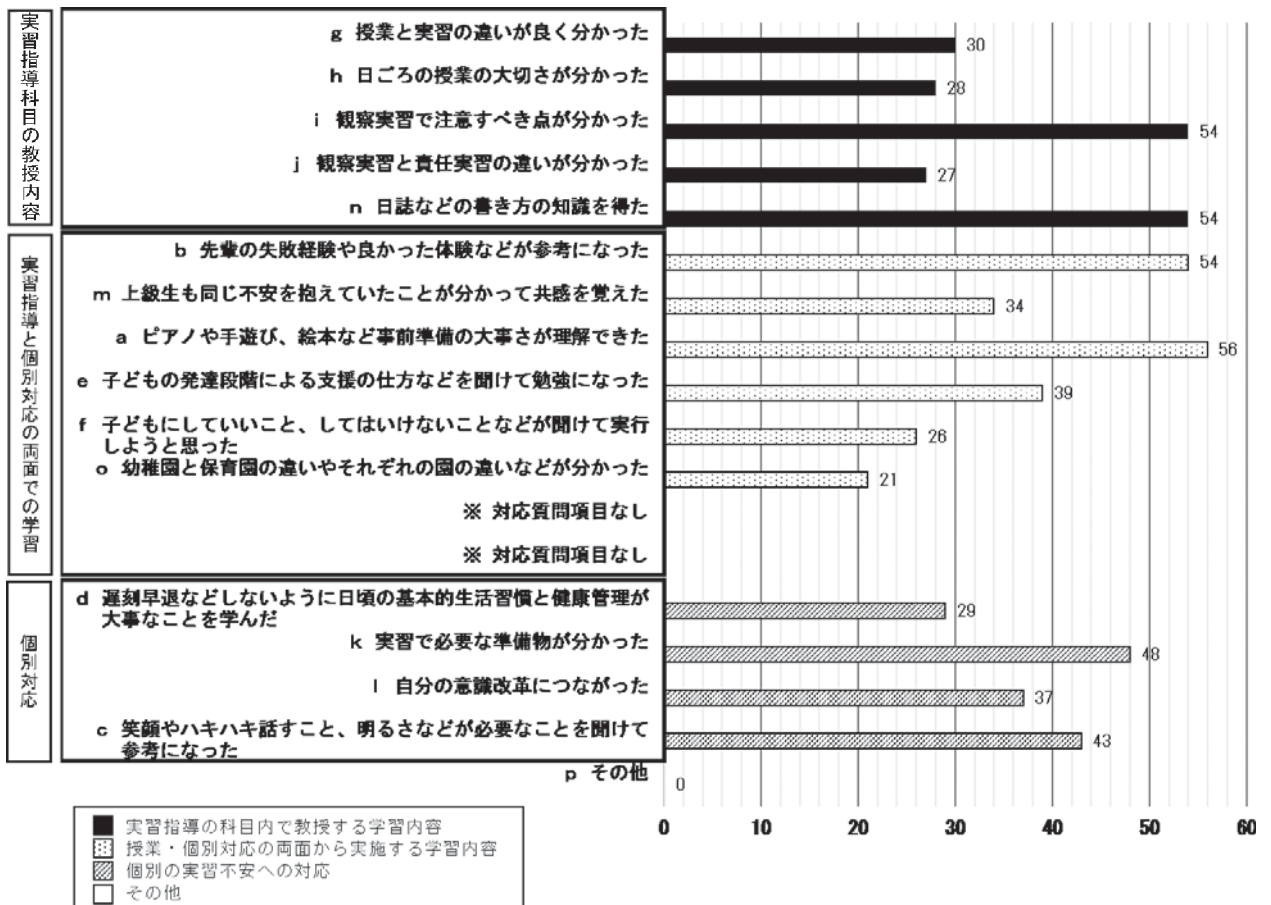
(2) 1年生への事前学習としての結果と分析

ここからは、事前・事後学習それぞれの内容に焦点を当てて、アンケート結果の分析をすすめていきたい。まず事前学習については、1年生のアンケート結果を、先に示した表5、表6の事前学習の項目に沿って整理していく。表5の結果が、次頁の図7、表6の結果が図8である。



(筆者作成)

図7. 学習会の何が良かったか



(筆者作成)

図8. 先輩からのアドバイスで良かった内容

図7は、学習会を肯定的に評価した者に対して、学習会全体を振り返り、何が良かったのかを質問した結果である。なお、実習指導の科目内で教授される学習内容と、授業と個別対応の両面で行う学習内容、それぞれの取り組み状況を確認するために、図中では区別して表現した。

こうしてみると、当初予想していた授業と個別対応の両面で行う学習だけでなく、「d 実習の心構えに役立った」など、授業で教授する学習内容を選ぶ者が多かったことは、意外な結果である。自由記述でも、「実習体験の話聞いて様々なことが理解できた」、「実際に実習の話聞くことで、心構えにすることができた」といった感想がでており、実際の体験談を通して、習ってきた学習内容を再確認することにつながったようである。

また、最も多く回答の得られた「f 先輩からのアドバイスがためになった」は、様々な内容を含んでおり、設問2-3でさらに詳細な内容を確認している。そのため、この先輩からのアドバイスについては、図8として別にまとめた。こちらも、授業での教授内容と個別対応の内容、両面からの内容にそれぞれ区別して整理している。

図8については、参加した63名の1年生全員が回答している。こちらも、「学習会では、実習指導の科目で教授しきれない、個別対応やその両面で行う学習内容に対する評価が高くなる」という予想に反して、実習指導の科目内で行われる内容も多く選択される結果となった。なかでも、多く回答がみられたのは、実習指導の教授内容である「i 観察実習で注意すべき点がわかった」、「n 日誌などの書き方の知識を得た」、そして実習指導と個別対応の両面からの学習である「b 先輩の失敗経験や良かった体験などが参考になった」、「a ピアノや手遊び、絵本など事前準備の大事さが理解できた」の4項目であった。一方で、実習園ごとの特徴を理解する「o 幼稚園と保育園の違いやそれぞれの園の違いなどが分かった」の回答は、最も少ない結果となった。

この結果から、学習会における事前学習は、2年生から具体的な実習体験を聞くことで、実習指

導で学んだ基礎学習と実習のつながりや実習の意義についての理解を深めていくことが示唆された。言い換えると、この段階の1年生は、実習指導で学ぶ学習内容と実習の結びつきを、まだ十分理解できていないと考えられる。それゆえ、最初の観察実習で行う内容や普段の授業内容がどのように役立つのかを具体的にイメージしていくことが、はじめての実習を行う1年生にとって、重要な学習であるといえる。また、1年生の自由記述からは、単に「不安が解消された」だけでなく、「不安から楽しみに変わった」、「実習楽しみ」といった感想がみられた。これらの感想から、1年生ははじめての実習に対して「よくわかっていない」ことへの不安を抱えており、2年生から具体的な実習の様子を聞き、実習イメージを具体的にしていくことで、不安が軽減されるだけでなく、「楽しみ」という期待に変換できることも示唆された。このことは、2年生から1年生に実習内容のポジティブな面を伝えたことが、大きく影響したと考えられる。そのため、今後は1年生の不安を期待に変化させていく要因について、さらに分析することで、事前学習の充実を図る必要がある。

一方で、不安が軽減されたという内容だけでなく、学習会を行い余計に不安が高まったという感想もみられた。この不安の高まりは、「n 日誌などの書き方の知識を得た」に関する内容が多く、日誌などの記録の書き方については、理解が深まった反面、不安も高まるという結果となった。このことは、1年生が2年生との交流を通じて、漠然とした細かい不安を少しずつ取り除いていったことで、残った不安に焦点を当てることができるようになったためであると考えられる。このことは、実習までに、または実習中に何をすればいいのかという、実習目標や課題の明確化を図る作業にもつながっている。このように、事前学習を通して不安が明確になり、より不安が高まるという結果は、枝元ら¹⁶⁾の研究結果とも一致する。また、学生の実習不安の類型化を行った本多潤子と櫻井登世子¹⁷⁾によると、全体的に実習不安の低い学生は、そもそも実習に対する達成動機が低いとも

考えられる。つまり、最初から実習不安の低い学生は、実習を無難にこなしていこうという意識を持っていたり、自己の能力を適切に評価できていなかったりといった危険がある。それゆえ、この不安の高まりは、ネガティブな変化ではなく、自分自身の課題と向き合うために、必要な変化であったと評価することができる。

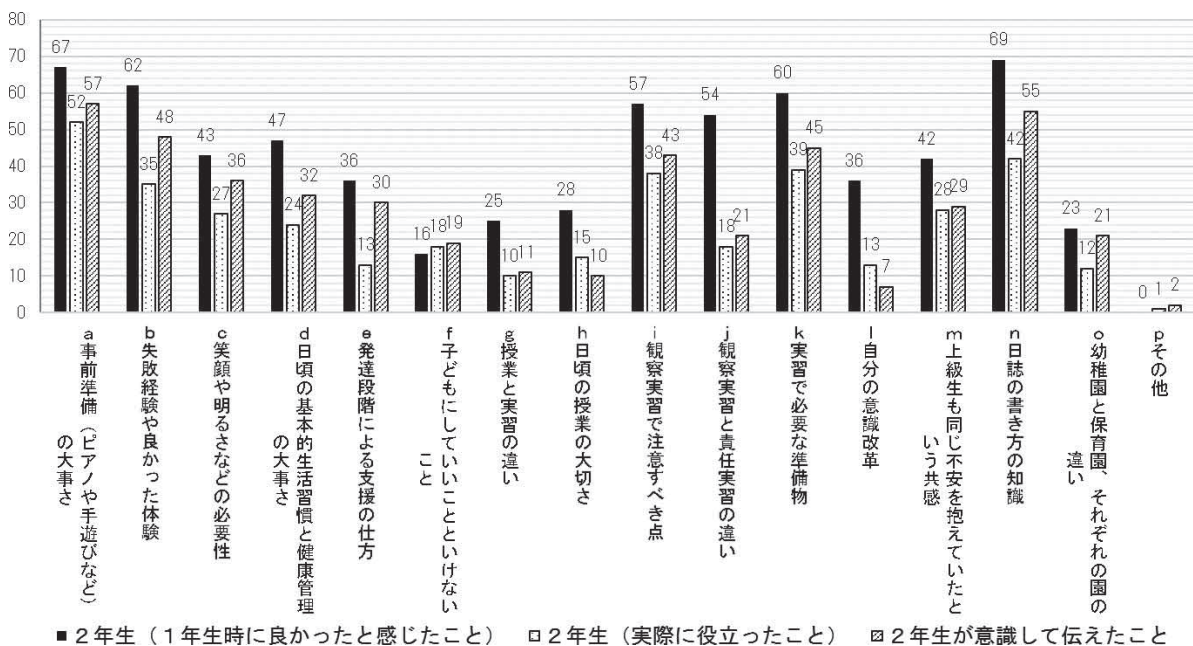
ここまで見てきたように、学習会を通して①実習や実践における理論・技術の意味の再確認、②実習イメージの具体化による不安軽減、③実習に向けた自己課題の明確化、といった事前学習としての教育効果を期待できることが明らかになった。そしてそこには、1年生の実習不安を安心や期待に変換していくための仕組みが不可欠である。そこで、今後は1年生についても準備段階の取り組みを行い、事前に質問を準備したり、自分の不安や疑問を整理したりすることや、学習会を通じた気持ちの変化を整理できるようなワークシートを取り入れるといった工夫も必要であろう。

(3) 2年生への事後学習としての結果と分析

次に、事後学習の分析では、過去の自分や実習中の自分を振り返り、そこから1年生に自分の意図や課題を言語化し伝えるという、事後学習の振

り返りの流れを確認する必要がある。この振り返りのプロセスは、学習会前の授業や準備から取り組まれており、今回のアンケート結果から、その内容を分析するには限界がある。そこで、今回は1年生時のアンケート結果と【2年生用-①】、【2年生用-②】の「学習会で良かったと感じた内容」、「実習を終えて役立ったと感じたこと」、「今回の学習会で意識して伝えたこと」の内容を比較し、振り返りによるおおまかな意識の変化を確認することにとどめておきたい。この3つのアンケート結果を整理したものが、図9である。

図9を見てみると、1年時に良かったと感じた内容の回答数と比べ、実習で実際に役に立ったと感じた内容の回答数は、ほとんどの項目で減少していることがわかる。菊地則行¹⁸⁾によると、人は集団活動を通して、自分の力量と他者の力量、もしくは集団から求められる力量とのギャップを自覚する。それによって、自己理解を深化させ、自己形成の目標を修正・確立することにつながる。彼の考えに基づくと、図9の「実際に役に立ったこと」の減少は、実習で理想の目標に届かない経験を通して、自分の力量に合った現実的な課題を感じた結果と推察される。それゆえ、「実



(筆者作成)

図9. 1年生時-実習後-事後学習後の意識の変化

際に役立ったこと」に比べて「2年生が意識して伝えたこと」の回答数が、多くの項目で増加したことは、「1年生時に良かったと感じたこと」をふまえながら、より充実した実習に向けて後輩を支援する姿勢が反映されたためと考えられる。

その思考過程には、2年生が自分の実習経験と1年生時の状況の両方を振り返り、実際に役に立った内容と1年生の時に必要であると感じた内容との間に生じたギャップを調整して、後輩へ伝えることが求められる。今後、この過程を組織的に育成することができれば、異学年の交流を通じた学習効果を、相乗的に高めることも期待できるだろう。

また、意識して伝えた内容で最も回答が多かったのは、「a 事前準備（ピアノや手遊びなど）の大事さ」（57人）であり、次に多かったのが「n 日誌の書き方」（55人）である。この2つは、他の項目と比べて、具体的な実習課題や保育技術に関する内容である。中原¹⁹⁾は、いくつかの実習を終え、後半の実習になると、実習経験を活かし、より具体的な知識・技術についての必要感が芽生えたと示唆している。つまり、2年生が必要な保育技術や知識という視点から、実習経験を振り返ったことで意識された結果とも考えられる。今後、幼児保育学科の学習成果に示す問題発見や洞察力の獲得につながっていることも含め、振り返りのプロセスをさらに分析していく必要はある。それでも、2年生の意識の変化から学習会が①1年生からの成長の振り返り、②実習経験の客観的評価、③自己の課題への気づき、④自分の経験の言語化、という事後学習の有効な取り組みであることが推察される。

また、学習会を肯定的に評価していた2年生の自由記述では、「1年生の役に立てた」、「必要なことを伝えられた」などが良かった点として記述されていた。この感想からは、④自分の経験を言語化し伝える、という取り組みによる自信や達成感の高まりの効果が示唆された。それゆえ、本学科の学習成果に示す自尊感情の発達に寄与する成果が得られたと考えられる。2年生は、学習会の

準備を通して、すでに同級生間の情報交換を行っており、学習会当日のプログラムで新たに「保育者としての専門的知識・技術の共有」に取り組む機会は、どうしても少なくなってしまう。その一方で、1年生の質問や疑問に対して適切なアドバイスや体験談を伝え、1年生の安心につながった様子を確認することは、2年生の「しっかりと伝えられた」という達成感や自信につながっていたと考えられる。このような他者の反応が自己成長につながることは、福田篤子²⁰⁾の調査結果でも指摘されている。福田は実習後、実習中の気持ちの変化についての振り返りを行い、子どもとの関わりで子どもが喜んでくれたときや保育者から高評価を受けたとき、学生の気持ちがプラスに働き自己成長を得ることができていたと論じている。彼女の調査は実習中の学びに関するものであるが、事後学習の学びにも当てはまると考えられる。

しかし、このような事後学習による教育効果が示唆された一方で、先に示したアンケート結果では、1年生時よりも肯定的評価が10%も減少してしまった。このことは、学習会の経験が2年生自身の学びの実感に十分結びついていないことが原因であると考えられる。あるいは、実習の体験を通して、より高いレベルの目標を抱くことができた結果、現実の自己像をかえって低く評価したことも考えられる。それゆえ、学習成果の獲得と関連づけた分析が今後の課題といえる。

ここまで考察してきたように、学習会による事後学習では、学習会の準備段階から（1）実習体験や1年生時の振り返りを行い、（2）整理した内容を言語化し、（3）学習会で1年生に伝え、（4）1年生の安心した反応を確認する、といったプロセスを通じて、「1年生の役に立った」という達成感や自信を得るという効果が期待される。しかしながら、今回の学習会では、この（4）1年生の反応を確認するための取り組みが不足していた。その結果、2年生は1年生に自分たちの思いが伝わったかどうかかわからず、伝え方やプレゼンテーションを自己評価することができなかったと考えられる。つまり、今後、事後学習としての

効果を高めていくためには、1年生からのフィードバックの仕組みづくりが必要であろう。具体的には、まず1年生からのフィードバック時間の設定や1年生のアンケート結果を後日、2年生に公開するといった方法が考えられる。また事後学習として2年生自身が学習会で何を行うのかということ意識できるよう、達成目標の可視化や指標づくりも検討していく余地があるだろう。事後学習の教育効果については、今後、これらの工夫や振り返りのプロセスとともに検討を重ねていく必要がある。

V. おわりに

本稿では、2017（平成29）年度から学科行事として取り組んでいる「異学年交流学习会」について、学生アンケート調査の結果をもとに、その事前・事後学習としての取り組みや期待される教育効果について分析、考察してきた。その結果、学習会が単なる行事でなく、実習指導科目を補う事前・事後学習の取り組みであることを示すことができた。また、その具体的な効果として、1年生の理論と実践の結びつきの再確認や、2年生の自信や成長につながることを示唆された。

このことは、保育者の養成課程における効果的な事前・事後学習の取り組みを検討するうえで一助になると考えている。しかし、この学習会はまだはじまったばかりの取り組みであるため、今後、この研究結果をもとに、より効果的なプログラムの検討や事前・事後学習それぞれの教育効果についての分析をすすめていく必要があるだろう。

また、今回、分析をすすめてきた学習会は、実習指導の科目を補う学習として位置づけられる。それゆえ、養成カリキュラム全体との関係について、考慮しておかなければならない。加えて、複数の実習それぞれで事前・事後学習が行われていることを考えると、それらの実習における事前・事後学習と学習会のつながりも重要となる。本学科では、すでにこの学習会を中心に、各教科・教員との連携を図っているが、日常的な教員の情報共有や各科目で学習会の事前準備・フィードバ

クを取り入れるなど、連携強化を図ることも可能であろう。そこには、学科内の専任教員だけでなく、非常勤講師や他学科の教員との共通理解や連携の課題もある。今後は、学習会の中身についての検討だけでなく、こうした全体のカリキュラムもふまえて、研究をすすめていく必要がある。

引用文献

- 1) 三木知子・桜井茂男, 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響, *教育心理学研究* 46巻, 2号, 203-211, 1998.
- 2) 大神優子, 保育実習生の子どもの関わり—集団及び個人への対応の変化—, *和洋女子大学紀要* 第60集, 13-22, 2019.
- 3) 佐野友恵・廣橋容子, はじめての実習に対する不安感と実際(1)～不安要素の特定を中心に～, *国際研究論叢* 24巻, 2号, 157-170, 2011.
- 4) 宮崎大樹・浜田幸作・池澤眞由美・末田光一・竹村正・吉村斉・寺尾康・田村由香・山本英作・Paula D.Fabian, 短期大学における教育・保育実習に関する異学年交流学习会の教育効果, *高知学園短期大学紀要*, 第49号, 2019.
- 5) 文部科学省, 教職員免許法施行規則 第6条第1項
- 6) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長, 指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について, 2019. (<https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000546183.pdf>, アクセス日2019年9月17日)
- 7) 中原大介, 保育者養成教育における実習前不安に関する一考察, *福祉健康科学研究* 第14巻, 65-75, 2019.
- 8) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長, 前掲通知, 2019.
- 9) 同論文
- 10) 枝元香菜子・山本礼二, 事前授業による教育実習不安の変容—教職志望学生のセルフ・エフィカシーに着目して—, *目白大学高等教育*

研究 第23号, 11-19, 2017.

- 11) 大野木裕明・宮川充司, 教育実習不安の構造と変化, *教育心理学研究* 44巻, 4号, 454-462, 1996.
- 12) 全国保育士養成校協会, 学生の自己成長感を保障する保育実習指導のあり方—保育実習指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを中心に—, 平成26年度専門委員会課題研究報告書, 2015.
- 13) 遠藤純子, 保育実習事後指導における振り返りの意義と課題—関係性と時間性の中で生じるストーリーに着目して—, *昭和女子大学現代教育研究所紀要* 第3号, 63-73, 2017.
- 14) 井口眞美・井上宏子・山下晶子, 実習生を指導する経験が保育者自身の保育の質向上に与える効果—幼稚園・保育園実習において大学が果たすべき役割を探る—, *実践女子大学生*

活科学部紀要 第56号, 51-59, 2019.

- 15) 宮崎大樹ほか, 前掲論文, 2019.
- 16) 枝元香菜子・山本礼二, 前掲論文, 2017.
- 17) 本多潤子・櫻井登世子, 幼稚園教育実習における実習不安の類型とその特徴, *田園調布学園大学紀要* 第6号, 49-60, 2011.
- 18) 菊地則行, 啓発的経験と心理学, 菊池武剋(編), *進路指導*, 中央法規出版, 81-94, 1993.
- 19) 中原大介, 前掲論文, 2019.
- 20) 福田篤子, 学生の自己成長感を支えるために—保育所実習Ⅰの振り返りから—, *田園調布学園大学紀要* 第12号, 141-150, 2017.

受付日：令和元年10月11日

受理日：令和2年1月17日

Original Paper

Educational Effects of the “First-and Second-grade Student Study Group and Information Exchange” for Student Teaching and Practical Childcare Training in a Junior College (2)

Naomi OKAMURA^{1*}, Daiki MIYAZAKI¹, Kosaku HAMADA¹, Mayumi IKEZAWA¹,
Tadashi TAKEMURA¹, Hitoshi YOSHIMURA¹, Yasushi TERAOKA¹, Yuka TAMURA¹,
Eisaku YAMAMOTO¹, Paula D. FABIAN¹ and Nobuhiro OHMATSU¹

Abstract: The purpose of this study is to examine the educational effects of the “student information exchange study group.” Specifically, we analyzed the results of questionnaires from the perspective of learning from before and after childcare training. Our research targeted 63 first-grade students and 77 second-grade students from the Department of Teacher Training, who participated in the information exchange study group conducted in 2019. Based on the results of the questionnaires, we analyzed the learning situation before and after practical training, as well as its expected effects. According to our analysis of the results of our previous review and pre-training and post-training learning, we found that the student information exchange study group supplemented the classroom lessons. Thus, the educational effect is the “reconfirmation of the importance of theory,” as well as “growth by conveying experience.” Furthermore, it is also revealed that “mechanism that turns anxiety into expectations” and “feedback from the first-grade to second-grade” are required to achieve the educational effects. Therefore, future research must consider more effective educational programs along with their specific educational effects.

Key Words: childcare training, teaching practice at kindergarten, study before and after practical training, first and second-grade student study group information exchange.

^{1*} Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education and Care, Email: nokamura@kochi-gc.ac.jp

